

書 評

中田光雄著『文化・文明——意味と構造』（創文社 1990年 699頁）

竹 中 正 夫

本書は、人間の文化・文明を総括的にとらえ、哲学的、思想史的視点から検討を加え、その意味と構造を把握しようとした意欲的な労作である。文化といい文明といい、人間の日常生活に密接に結びついているものであり、今後ますますその重要性が問われているものであるが、近代化の過程においてその細部についての専門的分析はなされていったが、内包する複雑な諸現象を総合し、原理的にまた組織的に把握する作業は必要とされながら中々容易な業ではなく、全体的にわたる評論的なものはあっても、組織的に体系化した労作は少なかった。その点からいって中田光雄氏の著書は、独自の構想をもって、文化・文明の意味と構造の解明に一つの示唆を与えるものとして評価したいと思う。

著 者

著者は、東京大学教養学部、同大学院で比較文化を専攻したのちパリ大学大学院で研鑽をつんで博士の学位を得て帰国、現在は筑波大学教授をつとめ、現代文化論、比較文化学などを研究しておられる。

著者はすでに、『ベルグソン哲学、実在と価値』（1977年）『文化の協応——比較文化概論』（1982年）『諸文明の対話——マルロー美術論研究』（1986年）などの労作があり、本格的な文化・文明論を執筆する背景となっている。最初の著作である『ベルグソン哲学・実在と価値』は554頁にわた

る大著で、著者がパリ大学に提出した「ベルグソン哲学における価値観念の役割」と題する博士論文を基として書かれたものである。従来から、ベルグソンはその主著『道德と宗教の二源泉』にあらわされているように、存在の実体を生成としてとらえ、単なる変化ではなく、質的な積み重ねと変化のなかに存在をとらえようとした实在論の哲学者としてとりあげられていた。しかるに、同氏のベルグソン研究は、ベルグソンの他の著作との関連からその価値論に光をあて、それが、彼の把握する实在とどういう関係にあるかを分析した点において注目された。これは、フランスにおいて、今日いささか等閑されかけていたベルグソン哲学に光を与えると共に、ベルグソン哲学における倫理学の可能性という新しい視点を与えるものとして評価されるに至った所以であろう。

表題について

偶然なことかも知れないが、さきにあげた著者の著書の中で、一つは、『文化の協応』もう一つは、『諸文明の対話』と文化と文明がつかい分けられているが、本書の表題は、『文化・文明——意味と構造』として両者が併記されている。著者によると、本書は「もともと、人間活動の総体をそのもとも基本的な拠点から包括的に考察しようという試み」（3頁）であり、「人間の生活様式の総体」としての「文化」と、「近—現代・西欧世界をも十分に包攝しようという論考の趣旨」から「文明」ということばを併用している。さらに、質—量・双方の動向を視野に入れる点からも、文化・文明の連記に至ったことをつぎの様にのべている。

「文化」は、他方、人間活動の質的上昇の動向をも含意し、この観点からみれば、「文明」は人間活動の量的増殖の動向を含意するともいえる。人間活動をその総体において考察するということになれば、西欧型・近—現代世界と非—西欧型・諸世界の双方のみならず、この質—量・双方の動向をも十分考量しなければならないから、量的増殖過程の質的上昇化への要請も含意しつつ、「文化・文明」の連記方式はやはりやむをえない。（3頁）

要するに、著者がめざしているのは、「人間活動の総体」の基本的分析・把握であり、「文化・文明」の連記方式が必要であるというのである。この表題に、すでに著者が複雑多岐にわたる人間活動を全体として、総体的に把握しようとする意図がうかがえる。

著者は、文化・文明の全体を知的に把握しようとするねがいは、人間の身のほどを忘れた野望に属するかもしれないとしながらも、部分についての近代の専門分化のあとをうけて人間活動の「全体」への回帰を現代の切迫した必然であるにとらえ、その困難な課題に敢えてあたろうとしている。この点においては、本書は、現代の文化・文明論の課題を正面からとりあげようとする意欲的な作品であるといってよい。

基本的分類と構想

著者は、文化・文明論を総合的に展開すると同時に組織的に把握・分析しようとする。

まず、文化・文明の理解にあたって、四つの関係が含まれていることを指摘する。それらは、一、「自然」との関係（*cultura* = 耕作）、二、「自己」との関係（*cultura* = 教養）、三、「神」との関係（*cultus* = 祭祀）、四、「他人」との関係（*civitas* = 共同体）の四つの関係である。これらは、人間の存在論的条件であり、基本的関係である。

さらに、著者は、人間の活動を四つの体系に分ける。その一つが、価値活動でそこに宗教、芸術、倫理、教育が含まれ、第二が認識活動でそこでは、哲学、科学、言語、歴史、文学があげられ、第三の機能活動として、政治、経済、法律、技術、社会、コミュニケーションが指摘され、これら三つが、目的をもつ活動とみなされ、第四の脱・目的活動として遊戯・スポーツがあげられている。

こうした基本的分類に基づいて著者は、それぞれの活動体系についての分析をすすめている。すなわち、第一篇第一章の価値・活動体系においては、「価値の信奉」にかわる宗教、「価値の創造」に関係する芸術、「価値の達成」

にあたる倫理、教育、「価値の擁立」に与る国家の意味が論じられている。

第二章では、認識・活動体系が扱われ、「事象一般の認識」としての言語、「人間事象の認識」にかかわる文学、歴史、「事象の法則の認識」に与る科学、学問、「事象の原理の認識」を使命とする哲学、が叙述されている。

さらに、第三章では機能・活動体系が論述され、全体運営の機能を果すものとして政治、法律、「関係運営の機能」を受けもつものとして社会・コミュニケーション、「個体運営の機能」を受けもつものとして経済、技術の意味が論述されている。

第二篇は、脱一目的・活動体系として遊戯、スポーツの意味が論じられ、結篇では、これらの四つの活動体系とさきにあげた四つの基本的関係の相互の協働関係を検討し、人間の文化・文明の意味と構造の解明に迫ろうとしている。課題がきわめて広汎に及ぶため充分な肉づけある論述に到らず、やや図式的となっているところもあるが、著者の文化・文明論の組織的体系を知ることが出来る。

補論と付論

著者は、右の本論にひきつづいて、補論を設けて「現代諸思潮の検討」をしている。そこでは、一. ガイア、エントロピー、エコロジー、バイオ、生命倫理学 二. 都市計画、サウンド・スケープ理論、ジオ・ソシオロジー 三. 情報、メディア、コンピューター 四. 無意識、トランス・パーソナル 五. ポスト・モダン 六. 都市論 七. 梅棹文明学 などの現代的課題についての著者の検討を加えている。ここでは、多少断片的、散発的になるきらいがあるが、著者の視野のひろがり、自らの「四関係——円成体」の理論のはばひろい適合性を論じている。

最後に付論として、「基礎概念の検討」の題の下に、本書で取り扱われた基礎概念をもう一度検討している。そこで取り扱われている基礎概念は、一. 文化と文明 二. 生活様式、生の様式、行為様式、存在様式 三. 自己実現、存在成就 四. 意味の体系、意味の現成であり、これらの概念を哲学的に検

討している。本論の部分が、広汎な文化・文明の諸現象の分類・整理・解明であるとする、この付論の部分は、基本概念についての哲学的意味の吟味であり、他の学説との比較検討をすることによって、自らの文化・文明論の特色をうきばりにしようとしている。恐らく、著者が最も得意とする領域がここにあるように思われる。

評 価

多岐にわたる「文化・文明」の広い領域の意味と構造について組織的な考察をなし、著者特有の体系化を試みている点で、本書はきわめて意欲的な労作であり、かつ、「文化・文明」について関心をもつ者にとって、示唆に富んだ業績であると思う。大体近代の学問の傾向として、「文明・文化」の諸現象の一領域を限定し、さらにその中の一課題を細分して研究する分業化が多いなかで、トータルに「文化・文明」の意味と構造をとらえようとする巨視的な研究は、必要とされながら、困難な作業であるため、中々進められず、まとまったものは、案外少ない。なされても、評論的になったり随想的になったり、断片的な寄せ集めであったりして体系的な労作が望まれている。そうした中で、本書は、一つの貢献をしていると思う。

内容的にいうなら著者は、「文化・文明」を人間に固有の「存在様式」としてみなし、それを「神（至高価値）」「自己」「他人」「自然」の四つの基本的な関係においてとらえ、人間の活動を、(1)認識活動、(2)価値活動、(3)機能活動、(4)遊戯・スポーツ活動の四つに分類していることなどがその体系の中心的性格となっている。これらは、示唆に富んだものとして評価されると思う。

著者が人間の「文化・文明」をとらえるにあたって強調する二つの姿勢がある。一つは目的論的志向である。「文化・文明」の四関係において、人間は存在の充足を求め、「自己充足」「自己実現」「自己成就」にむかうものであることが論述されている。もう一つの特徴は、人間の「文化・文明」は「人間的——有意味性の全体」であり意味を把握することによって「文化・文明」

の分節化と構造化がはかられるという論旨である。この二つの柱が前述の四つの関係論と、四つの活動論とからみあって本書がおりなされているとあってよい。

最後に、二つほどわたしの気づいた点をのべさせていただいて攔筆することにする。一つは、目的論についてである。わたしは、かねがね、目的論的思考は、人間を前におし出し、「文化・文明」の積極的な面をとらえるに重要なアプローチであると思っている。エルンスト・ブロッホにしても、ユルゲン・モルトマンにしても、目的論的な志向をもった人たちで、彼らから「希望」についての思想が生まれたことは偶然ではない。しかし、目的論は、人間の「自己実現」、「自己成就」に力点をおくため、理想主義的に流れやすい側面をもっている。「ユートピア」「神の国」「進歩」「希望」は、彼らの好んで用うる概念である。

それに対して、「誠命論」は人間の「弱さ」「みにくさ」「離反」「原罪」に注目する。目的論が、上昇的・自己完成的になるのに対して、誠命論は、自己の蔽いがたい疎外や離反の現実を直視し、自己が聴従すべき普遍の誠命をきこうとする。著者の思考の中に、誠命論的な側面がないというのではない。たしかに、著者は、価値体系の章では、「ネガチブ価値」を論じておられる。(70頁以下、および、115頁以下)。しかし、全体として、著者の「文化・文明」をとらえる視点のなかでは、それらは、目的論におけるように主要な関心を呼んでいないように思われる。わたしは、このネガチブな価値の把握と克服が、「文化・文明」論の重要な課題であると思っている。

もう一つの点は著者が展開しておられる意味論に関係するが、著者は、「文化・文明」のパノラマを広汎に眺望、解明しているが、主としてその視点は、近代西欧哲学の研鑽から培われてきたものである。もちろんそこには、田辺元や梅棹忠夫などの思想も登場している。しかし、主な論拠となっている思想的素材は近代の西欧哲学である。このことは、本書の手堅い特色であると思う。それと同時に、「文化・文明」の交錯と交流の時代において、東洋とくに、日本において培われてきた、「文化・文明」についての思考を積

極的に、また、批判的にとりいれた「文化・文明」論がすすめられることを切望するものである。